

放送大学通信

# on air

オン・エア

no. 73

発行日 平成16年3月

発行 放送大学

〒261-8586 千葉県美浜区若葉2丁目11番地 043-276-5111(代)

## CONTENTS

世界の遠隔教育の潮流の方向 - ICDE-SCOP_03参加記	1
助教授 大橋 理枝	
就任のあいさつ	3
助教授 原田 順子	
退任のあいさつ	4
副学長 麻生 誠 / 副学長 渡邊 守章	
退任のあいさつ	6
教授 酒井 豊子 / 教授 宮澤 康人 /	
教授 馬場 謙一 / 教授 阿部 齊 / 教授 倉沢 進 /	
助教授 橋本 裕蔵 / 教授 神代 和欣 / 教授 伊藤 貞夫 /	
教授 江刺 一公 / 教授 傳田 章 / 教授 濱田 隆士	
全国生涯学習フェスティバルに「放送大学フェア」を出展	12
動き出すアジアの公開・遠隔教育(ODE)ネットワーク	13
助教授 大石 和欣	
平成16年度開設改訂科目紹介	16
社会保険と市民生活(04)	
早稲田大学 教授 久塚 純一 / 教授 大曾根 寛	
中世日本の物語と絵画(04)	
学習院大学 教授 佐野みどり / 京都工芸繊維大学 教授 並木 誠士	
研究室だより	17
教授 佐々木 弘 / 教授 滝口 俊子	
平成16年度第1学期教務スケジュール	18
教務のお知らせ	19

# 世界の遠隔教育の潮流の方向

— ICDE-SCOP\_03参加記 —

人間の探究 助教授 大橋 理枝



ICDE-SCOP\_03 オープニングセッション

2003年10月29日から10月31日まで、スペインの主要都市バルセロナにあるカタロニア公開大学に於いて、ICDE-SCOP\_03が開催された。これは、国際遠隔教育評議会(ICDE)に加盟している大学の学長・副学長などが一堂に会し(SCOP)、情報交換や共通の懸案事項に関する討議を行う場として1993年から開催されている。今年の公式参加者は19カ国41名であり、本学からは、丹保学長、佐久間教務部長、森山大学院課課長補佐、及び筆者が参加した。今回の会合のテーマは「コミュニケーション社会のための大学 公開遠隔教育のための最優良事例と新たな挑戦」とされており、それぞれの国・文化・独自の事情などを背景に活発に意見が交換された。

## 会場 — カタロニア公開大学

カタロニア公開大学の本部の建物は、あの有名なサグラダ・ファミリアを見下ろせる丘の中腹にあ

る。スペイン政府に正式に認可された6学部16学科を設け、博士課程・修士課程・専門課程に合わせ、30,000人以上の学生が在籍している。1995年の設立当時はカタロニア語での教育を目的として

いたため授業もカタロニア語で行われていたが、2000年からはカタロニア語とスペイン語の両方で授業内容が提供されている。全てをインターネットで行う完全なバーチャル大学を標榜しているた

め、学習センターも殆どないし、本部の建物も大学の規模の割には小さいが、教員の研究環境の充実化のためにバルセロナ郊外に新しくリサーチ・センターを建設したばかりであった。今回の会議は、一日目はこの丘の中腹の本部の中のミーティング・ルームで行われ、二日目はできたてのリサーチ・センターの中で行われた。

## ICDE-SCOP\_03

オープニング・セッションでICDE事務局長からの歓迎の言葉やICDE-SCOP設立の経緯についての簡単な紹介があった後、今回の主催校であるカタロニア公開大学の学長から挨拶があり、現代のような先の見えない時代であればこそ人間中心の教育が必要であること、情報・教育の流れが「持てる者」から「持たぬ者」への一方通行であってはならないこと、情報技術はそれ自体を目的にすべきものではなく道具として使うものであり、人に対するサービスに供されるべきものであること、今後社会がますますグローバル化していく中で、各々の文化の発展は個々の個性やアイデンティティの尊重なくしては有り得ず、そのためにはお互いに協力・協調していくことが必要であり、これらの動きをどのようにして経済的に賄っていくか、またどうやって教員や教育内容やその他の資源の可動性を高めていくかが今後の課題になるであろうこと、などの指摘がなされた。

続けて、「グローバル化した世界における公開教育のネットワーク」というテーマと「学生及び教員のバーチャルな可動性」というテーマでそれぞれ二件ずつ基調講演が行われた。Heeger氏（アメリカ）の講演では、このグローバル化時代にあっても高等教育が未だに国や地域との関連で存在していることが指摘され、情報技術の発達の結果人々と知識との関係も変化し、大学がもはや「学ぶ場所」である必要はなくなった今、世界中の公開大学が相互に連携し、教材開発や図書館を共同化してウエ

ブ上で授業を提供すれば、世界中に存在する高等教育の需要に応じることができる、という提案がなされた。と同時に、共同化・提携・連帯と一口に言っても実際は困難を極めるのが実情であり、実施する際にうまく仲介できるようなシステムや組織が現時点では存在しないという点や、模範的な実施例がないという点などが、その実現を阻む要因として挙げられた。Abrioux氏（カナダ）の講演では、他大学と連携することは教育・研究・ビジネスの面で様々な利点があるが、教育内容の開発や配信の連携は決して簡単ではなく、むしろ教員の研究面での連携や単位互換という形での連携の方がはるかに現実的だということや、文化的背景が同様の学校との提携は比較的容易であっても、文化的背景が異なる学校との提携は困難な点が多いことなどが、実践例と共に示された。Mulder氏（オランダ）の講演では、「ポローニャ・プロセス」（ヨーロッパ全域に高等教育を行き渡らせると同時にヨーロッパ型の高等教育を世界中に浸透させるといった目的のもとに、ある国で取った学位や資格をそのまま他の国でも認定したり、単位修得のシステムの共通化、学部教育と大学院教育との二重構成の確立などを通じて、ヨーロッパ内の高等教育のシステムを共通化させようとする動き）の鍵は何にも増して教員と学生の可動性であることが述べられ、二校以上の大学の学部・学科の提携、学生自身が複数の大学の授業を履修することによって自らの教育内容を充実させていくこと、学業と仕事とに交互に従事しながら生涯にわたって教育を受け続けていく可能性などが示された。学生がオンライン上の可動性を確保すれば、実際に移動しながら可動性を実現しようとするのに比べ、実際の移動時間やそれに要する経済的な負担は遙かに少なく済むし、周囲の状況に左右される可能性も少ない。しかしながら、実際の移動による可動性の最大の利点は学生本人が現実世界でのより豊かな経験を積むことができるという点であり、現

実の教室の中で、より多様な仲間と共に、多様な環境で、対面で学習ができるということである。この利点はバーチャルな可動性の中では決して得られず、また他を以って替え難いものであるということがはっきりと指摘された。Mercado氏（メキシコ）の講演では、メキシコにおける高等教育の実情の紹介と共に「専門家」の過剰供給の問題が指摘され、その上でのより高度な専門家の養成のための生涯教育という観点からの遠隔教育の有効性が述べられ、インターネットのネットワークなどのインフラが整備されつつある中、専門教育の需要を満たすためには他の大学で作成された教材を地域に合うように改訂して使うことが有効であり、その場に合った形に内容を変えることによって教材作成側と受容側の文化差を乗り越えることが可能になるとされた。

基調講演四件の後での講演者との質疑応答では、オンライン上で



カタロニア公開大学

は独自の文化があるため学生自身の出身国の文化はさほど大きな問題要因とはならないこと、経済的に貧しい国の大学と提携を進めるためには他の国の大学との提携とは異なった形の提携が必要となってしまう、何らかの形で経済援助が得られなければますます豊かな国同士の間での連携ばかりが進んでしまうこと、などが話題として上がった。全体討論では、何故高等教育はビジネスに比べて国際化しないのか、という点や、現在の流れの中ではどうしても発展途上国が教育を受ける機会を得にくい、という問題や、何故教育を提供する側と受ける側とが決まってしまう（情報の流れが一方向に

なってしまう）のか、という論題が議論された。同時に、商業ベースで教育に参入しているところ（Cisco、Microsoftなど）の存在をきちんと認識し、教育界としてそれにどう対抗すべきなのかを真剣に考えなければいけないという意識が共有されると共に、先進国、特にアメリカやカナダでは高等教育というものの自体が大きな輸出商品になっているという指摘もあった。

二日目はイギリス公開大学のSewart氏から遠隔教育の歴史についての講演があり、遠隔教育がもともと人口密度が極端に低い地域の人々に教育の機会を与えるために始められたものであること、当初は初等・中等教育が目的であり、その後成人教育へと焦点が移り、高等教育が目的に加えられたのは1980年代になってからであること、最近では中南米やアジアの発展途上国を取り込もうという動きが活発化していること、その新しい市場を狙って企業家達が群がり、金目当てでひどい内容の「教育」プログラムを提供してい

る実情は極めて憂慮すべきであること、この流れに歯止めをかけるにはプログラムを配信する時点で何らかのチェックを行うことが必要であり、プログラムの質を国際的に保証する必要があること、などが述べられた。この日に行われた討論の主要な関心事は、国際的な連携の重要性と、経済的・文化的な問題、そして国際間の協調・提携を推進するための整理機構としてICDEの果たせる/果たすべき役割についてであった。

## 「国際化」の在り方

今回の会議で繰り返し耳にしたのが、営利企業による遠隔教育産業への進出に対する遠隔教育界側の危機意識と、大学間での連帯の可能性への言及だった。大学同士の連帯は単に大学の壁を越えるばかりではなく、一部ではもはや国の枠を超えた国際化の構想へと動きつつあるように見える。そんな中で、非常に身近なレベルの国際化の話、オランダ公開大学の先



生から伺った。オランダ公開大学ではその本拠地にある7つの建物に世界各地の遠隔教育大学の本拠地の名前を載せており、例えばイギリス公開大学の本拠地の街の名前をとって「ミルトン・キーンズ」という名前の建物があるという。そして、その建物のうちの一つが、何と当放送大学の本拠地である千葉をとって「チバ」という名前なのだそう。他国の大学との単位互換や交換留学など大学の制度としての国際化をいかに整備しても、学生や世論の意識がついていなければ結局失敗する。そのことを考えるとき、このように身近な視点から世界に目を向けさせるような「国際化」の形も、無視してはならない一つの在り方を示しているように思える。

## 就任のあはつ

### 巨人の肩へ登ろう

産業と技術  
政策経営プログラム 助教授 原田 順子



平成15年10月に着任いたしました。研究分野は経営学で、特に人的資源管理に興味を持っています。経営環境の変化に伴い、企業内部の仕組みがどのように変化し、それをどう評価するのかということを中心に勉強しています。研究対象は、賃金制度、ジェンダー・マネジメント、労使関係などです。経済指標を眺めると同時に、実際に関係各所にインタビューやアンケートを行い、分析します。

私は学部から修士課程まで、金融論のゼミに所属していました。社会人経験が転機となり、博士課程から現在の研究分野に移りました。言うまでも無く、金融市場と労働市場は大きく異なります。しかし、昔の勉強は無駄ではなかったと考えています。なぜならば、学部と修士時代には、知識そのものよりも勉強の仕方を学んだと思うからです。

学部で卒業論文を書いた際の最大の収穫は、既存の文献を整理することがなぜ重要であるかを理解したことです。リンゴが木から落ちるのを見て万有引力

を発見したという逸話のあるニュートンは、「もし私がより遠くを眺めたとしたら、それは巨人達の肩ののったからです」と言ったと言われています。今でもこの表現は、学問的業績は先達の成果の上にあるという意味で使われています。ところで、巨人の肩への登り方を学ぶことこそが、学問の「はじめの一步」ではないでしょうか。

本学は教養学部と修士課程から成っています。まさに、巨人の肩への登山口です。皆様の登山のお役に立つよう精一杯努力したいと存じます。よろしくお願ひします。

# 退任のあはつ



## 副学長を退くにあたって

放送大学 副学長 麻生 誠

くの学生さんの存在です。失礼を顧みず実例を挙げれば、94歳の高齢で卒業された学生さんがいます。戦前の義務教育修了後、仕立て職人として仕事に打ち込み、3人のご子息を立派に育て上げた後、念願の高等教育を受けるべく本学に入学、10数年をかけて卒業なさいました。94歳で初めて大学を卒業なさるといのは、世界でも最高齢の記録ではないでしょうか。これからもお元気で、一年でも長く放送大学の授業科目履修を楽しんで頂きたいと心から願っております。

いま一人、大変印象に残っている学生は、幼少期から旅役者の子として父親の一座で巡業生活を送り、その後も芸の道に生きてきた女性です。「社会と経済」という比較的難しい専攻に入学し、約10年かけて129単位を修得し、自分の体験に根ざしたマスコミ論を卒論として書き上げました。元来、能力のある人でしたから、卒業と同時に放送大学での学習経験をもとに「新学問論」を出版する予定で、その本のできあがりを楽しみにしています。この二つの事例に見られるような「喜び」が私が副学長を続ける力となってきたのです。

他方、大きな悲しみに直結する事件も数少なくありませんでした。私は卒業研究指導の中で3人の学生の死に出会いました。短大への進学を勧める母親に逆らって専門学校に進学した娘を理解したいと、30校ほどの専修学校の訪問調査を繰り返し、「日

本における専修学校の実態」というタイトルの卒業研究をまとめ、大学へ提出しようというその日の朝、心不全で亡くなった女性。人格障害という難しいテーマに取り組みつつ、その途中でなくなった方。そして、また直接に卒論の指導をした方々ではありませんが、何人もの学生が、様々な事情のもとに、病死したり、自殺したりという場面に出会ってきました。これらの学生の姿を思い出すと、生涯学習そのものが死を呼び込んだような気がして、自己実現を可能にするはずの学習によって自己を奪われてしまった方の悔しさ、無念さを思い、たまらない気持ちになります。とはいえ、亡くなった彼らの生き方を忘れることなく、私の残り少ない人生を、反省を込めて歩いていきたいと思えます。

最後にひとつ、気に掛かるのは、学部に入学者の学歴が上昇する傾向が強まり、そのことから中卒高卒学歴が80%以上になる団塊の世代に高等教育の機会を与えるという放送大学の大事な使命があまり意識されなくなったことです。いわゆるピーターソンの“education more education”の法則の実現は、ここ放送大学では防がねばなりません。

退任後は、もう少しの間だけ教育の実践を続けます。これからもご厚情を賜りますよう、お願い申し上げます。

さようなら。お元気で。

5年前の4月、吉川前学長の下で渡邊守章教授と一緒に副学長となり、本年3月をもってその職を辞し、それと共に9年間にも及ぶ本大学の勤務からも解放されることとなりました。身の丈を超える役目を引き受けることとなり、本人は一所懸命にやっただけですが、不十分なことが多く、皆様のご不満、ご不快の感も強かったことと思います。それにもかかわらず、理事長を始めとする役員の方々、教職員の方々、学生さんに至るまでのご支援、ご鞭撻を賜り、その御陰でようやく職責を果たせたとほっとしております。この場をお借りして、心よりの御礼を申しあげたいと存じます。誠に有り難うございました。

5年の間には、大学院の新設や設置形態の変更など、重要な改革がいくつかありましたが、私の思いはやはり一人一人の学生さんに繋がっていきます。

まず、嬉しかったことからご紹介したいと思います。それは、放送大学の教育を利用し、生涯にわたる自己実現を实らせた多



## 「見るべきほどのことは・・・」

放送大学 副学長 渡邊 守章

から頂けない。「安徳帝が実は女であった」などという謎はともかくとしてである。

人間、所詮なつたところのものとしてしか存在しないのだろう。それは放送大学と私の場合にもよく当てはまるので、少なくとも、11年前に、当時の嘉治・毛利両副学長から、「フランス語ではなく表象文化論で」とお声を掛けて戴くまでは、放送大学という存在は私の期待の地平に入っていなかった。

東大の最後の頃とは比較にならない暇な最初の内は、これで演出の時間が出来たという幻想さえ抱かされた（因みに放送大学における私の業績表には演出作品もはっきりその位地を占めている）しかし、「全国化」という最初の嵐はたちまちその幻想を打ち砕いてしまったし、やがて吉川学長の着任と、副学長としての大学院新設の作業は、幕張の里をもう一つの修羅場に変えることとなった。

ともあれ、放送というメディアと徹底的に付合ってやろうという決意は、様々な軋轢も誤解も生み出したが、しかし、私の人生の10年間の生き方として、決して後悔すべきものではなかったと思っている。テレビ・メディアを中心にした「映像というディスコース」と実践的に切り結べたことは、放送大学と放送大学学園に、私として最も感謝している点である。

大学院の修士課程の1期生を送り出す時点で辞めることも、切りのつけ方としては良いだろう。

所謂「6人会議」を中心に徹夜の作業を続けて発足させた大学院文化科学研究科は、「高度専門職業人」のための修士課程を謳ったが、我々として、その実体をしかと把握した上のことではなかった。実体がようやく掴めたのは、2年次に互る入学者選抜と研究指導、そして今年の修士論文の成果を目の当たりにすることによってであった。

通常の大学院に見られるような「モラトリアム型」の学生は極めて少なく、働く時間の余裕を少しでも活かして、知的エネルギーを修士論文作成に結集させている光景は、指導する側としても新鮮な驚きであった。「現代に生きる〈知〉の集蔵体」と直接向かい合い、そこから自らの課題をより普遍的な問題の系へと接続していく作業。それを通じて「知を生きることの価値」を手触りのある形で体験する。まさに大学院レベルにおける生涯学習の具体化であった。

過去と現在と未来の放送大学と、そこに関わり、これから関わるであろう方々の御健勝を祈って、お別れの言葉としたい。

# 退任のあはつ



## 放送大学での15年

生活と福祉 教授 酒井 豊子

を組み立てていくことの自己管理だったといえます。

放送大学の大きな魅力は、従来の学部・学科の概念を超えた専攻が設けられているところにあると思います。放送大学の設立にかかわられた諸先生の時代の先を見据えた英知を感じ、専門の壁をますます高くする傾向の見られる中で、放送大学ならではの切り口のいっそうの充実・発展を切望するものです。

私にとってもう一つの魅力は、卒業研究や学生サークル活動にかかわった仲間との交流でした。いろいろな年代の学生さんたちが掘り起こしてくる、生活に関するさまざま

な問題を議論し合い、通常の大学では得られない刺激を貰いました。退職後は、教員と学生という立場から解放された友人関係を深めることが大きな楽しみです。

最後の1年間は、大学院指導で10年分ほどの苦勞をしたように思われます。しかし、単純な専門の枠に囚われず、生活に根ざした実感と多角的な知見を踏まえ、高度な知的体系を組み立てようとする共同作業は、生みの苦しみもありましたが新鮮な刺激となりました。生涯学習社会の指針となる大学院として力強く発展することを祈念して止みません。

平成元年着任以来の15年は長くもあり、短くもありました。実験放送の時期から放送授業や面接授業の手伝いをした経験から、放送大学の姿はかなり理解していたつもりでしたが、いざ着任してみると戸惑いの連続でした。最も大きなストレスは、同じ専門領域の同僚も学生もいない孤独な研究室、そこにおいて独善的でない放送授業や面接授業



## 遠隔・大量教育のなかの 近接・少数教育

発達と教育 教授 宮澤 康人

かりでした。絶えまなく押し寄せる速達、今と来年と二年先の教務が同時進行するせわしなさ、担当すべき卒論指導生の多さ等々。「騙された」とこれを感じる人も少なくないと聞きます。とりわけ戸惑

ったのは、放送教材の講義で、目の前に受講者の顔が見えないことでした。カメラに向かうと、ギリシア神話にある、メドゥーサの首を見た人のように、石になってしまう癖は今でも抜けません。

放送大学に来てから、それまでとの違いに戸惑うことは

対照的に、学生諸氏はパーソナルな関わりを強く望んでいます。しかもそれは、教員に対してよりも、むしろ学友に対してです。40人の面接授業で、無理と思いつつゼミ方式を試みたところ、今時の普通の大学の教室では見られないほど、発言が活発です。同じテキストを別様に観る学友がいて、思い掛けないコメントを聴くことができ新鮮だった、という感想が必ずかえってきます。加えて卒論では、

若い研究者と組んで複数指導のゼミをすると、教員相互の発想の対立も見えて思考が刺激されたと歓迎されます。いずれも「認知徒弟制」といわれることに関連する事柄のような気がします。

TV電話は、擬似パーソナルな関係を作りますが、それは教員との一対一のタテの関係です。発想を異にする複数の他者を身近に感じることは違うでしょう。ゼミ方式には、遠隔・大量の知識伝達には

は欠けている「知の身体性」を補う働きがあります。ゼミで出会う学びの同志が、今の学習を励ますだけでなく、卒業後に始まる本当の生涯自己学習の支えとなる例をいくつも知っています。ゼミをやり易くするのに、教員の増員がたとえ無理でも、履修の仕組みから机の配置等々工夫の余地はまだありそうに感じています。



## 放送大学の一層の発展を 祈念して

発達と教育 教授 馬場 謙一

館が充実していても書籍が新しかったこと、また高名な先生方の講義テープがそっくり残されていたことでした。

この度、春日井市にある中部大学で、臨床心理学の大学院を作るお手伝いをする事になり、予定より1年早く退任させて頂くことになりました。放送授業にまったく不慣れな私を助けて下さった同僚や制作部の皆さん、有能な事務職の方々に、心から御礼申し上げます。

4年前、放送大学に赴任して最も嬉しかったのは、図書館

験に根ざした研究テーマの発見と取り組みは、放送大学ならではのものです、教師としても教えられることが多かったと思います。

以後、私は暇があると図書館で学生諸君と一緒にそれらの貴重な講義を視聴してきましたが、残念なことに、予定の1/3量の講義しか聴けぬままに、退任の日を迎えてしまいました。

今後は、中部大の仕事の他に、渋谷駅前にある後輩のクリニックで、精神科臨床にも励むつもりであります。社会にとって大変有益な放送大学の事業が、今後ますます発展することを祈念して、お別れいたします。



## 学問への関心を もっと多様化しよう

社会と経済 教授 阿部 齊  
(附属図書館長)

はけっして望ましいことではありません。現状では、「生活と福祉」と「発達と教育」の2専攻に6割の学生が在籍しています。この2専攻がカバーしている学問分野がそれぞれ重要な意義を持つことはいうまでもありませんが、学習者の関心はもっと多様であってよいはずで

す。本学のこうした傾向は、社会全体の趨勢でもあります。現在の社会では、安全や安定への関心が異常に高いのです。そのため、衣食住や健康など生活の安全に関わる分野や、心理面の安定に役立つ分

野の学問を学ぼうとする学生が多くなっているのでしょうか。いずれにしても、学生の関心は各個人の内面あるいは近傍に属する範囲に限られています。それ以外の、政治・経済・社会など多数の個人相互に関わることや、歴史・文化・芸術など多数の個人が関わって形成されてきたことへの関心は低いように思いません。自然科学も安全や安定とは無縁とされているのでしょうか。これが生涯学習の望ましい姿なのか、そろそろ反省すべき時期にきているのではないのでしょうか。

私は1985年7月に着任して以来、18年9ヶ月を放送大学の教員として過ごしてきました。それは、私の教員歴の半分近くを占めますが、私は他の大学では得がたかった貴重な体験を本学で得ることができたと思います。放送大学を去るにあたって、率直な感想を述べることを許して頂けるなら、本学の専攻間に在学者数の著しい不均衡があること



## 充実した7年間

社会と経済 教授 倉沢 進  
(東京足立学習センター所長)

会学界では、町内会は日本独特の組織というのが常識であった。『都市と人間』ロケのおかげでイタリア・シエナの住民組織コントラダに出会うことができ、今年の日本文学学会年報に、「町内会とコントラダ」という問題提起論文を書いたのは、ひとえに放送大学のおかげである。『都市空間の比較社会学』で触れた社会地区分析、私のライフワーク『新編東京圏の社会地図1975 - 90』は3月に東京大学出版会から刊行される。

東京足立学習センターの所

長としては、放送大学学生の姿に接することができた。学生諸君の実像が、大学の中枢部に理解されていない、誤った学生像を持って放送大学はどこへ行くのかと言う、やるせない思いの5年間も経験した。それも今となっては総括すれば、大変ではあったが充実した7年間ということになる。

多くの啓発を与えられた同僚の方々、人間と社会について改めて考えさせてくれた学生の皆さん、そして充実した7年間を与えてくれた放送大学に、心から感謝申し上げます。

着任の折、麻生副学長からは7年間に2、3科目作ればよいと言われたのが、終ってみれば主任講師を務めた科目が改訂を入れると7科目、教材作成に追われた7年であった。テレビレポーターの真似事をこの歳になってやるとは思わなかったが、楽しいこともあった。大学院生の頃日本の社



## 引越します、多謝。

社会と経済 助教授 橋本 裕藏

小生をご存じの方は少ないでしょう。東京文京学習センター所属で専門は刑事法。放送授業は数年前に閉講になった社会科学入門の内3コマを担当。面接授業は平成6年の着任以来関東の6センターの他、沖縄、北海道、山口、大阪、岐阜、三重、石川、旭川、愛知の各学習センターやサテライトスペースで「刑事法入

門」、「判例刑法研究入門」、「裁判と法」、「法律科目の学び方」等を開設してきました。小生の面接授業はレポートが多いと随分敬遠されてきました。一コマ2枚。「まとめ」と課題で各1枚。計12枚。時には13枚。多いとは思いません。旭川ではレポートの量に最初不満げに見えた学生さんが最後は身を乗り出して小生の話に聴き入って下さいました。ありがとうございます。特別講義「社会安全政策論」を聴いて下さった方が1人。嬉しかったと同時に放送媒体の威力を実感しました。社会安全政策論という哲学が放送

に乗ったのはこれが日本初です。現在、日本の治安悪化傾向は世界最悪です。殺人、強盗等他の重要犯罪は平成5年の検挙率が88.97%であったのに平成14年は認知件数が二倍強に増えたにもかかわらず検挙件数は50.17%まで落ち込んでいます。大学が果たすべき役割が深刻に問われている様に思います。良き法律家は悪しき隣人とか！相当に社会的地位身分が高いのに法的思考方法に不慣れな人が多い事を実感しました。放送大学には大変お世話になり感謝致しております。ありがとうございます。



## これからや年

産業と技術 教授 神代 和欣  
(神奈川学習センター所長)

最近では定年のことを「これからや年」というそうである(木村政雄「随想」『人事院月報』2004年1月号) 誠に言い得て妙である。平成14年の簡易生命表によると、71歳男の平均余命は13.64年であるから、もう一仕事やりたいことをやる時間は十分にある。

放送大学での6年間は、思ったよりはるかに忙しく、楽

しかった。IT時代になって、インターネットを教育・研究の道具として有効利用できたので、前任の大学時代よりもはるかに多くの情報処理をしたように思う。在任中に四つの講義、『産業と労使の関係』『ヒューマン・リソース・マネジメント』『中小企業の挑戦』『産業と労使』を作らせていただいたが、そのなかで国内のみならず、中国、東南アジアの現地企業や日系進出企業を多数取材できたのは、まことに有益であった。コストのかかっている映像教材をデータベース化してぜひ保存して下さることを期待す

る。また、社会人大学院生の中には、予想以上に熱心で良い学生がいる。初めての修士論文にはいくつか立派な作品があった。

後半の3年間は、神奈川学習センター所長として、職住近接の理想的な勤務を楽しんだ。私の古巣、地元の横浜国立大学からの出向者や臨時職員が事務を担当しているが、土日勤務・変則二交代制という勤務条件にもかかわらず、熱心に放送大学の土台を支えてくれたことに、心から感謝したい。



## 10年を顧みて

人間の探究 教授 伊藤 貞夫

文の指導を通して、仕事を抱えながら実生活と直ちに結びつかない学問領域に関心を寄せ、時として多大の時間と労力をそのために割く学生諸氏の姿を見て、「虚学」に専心しうる我身のありように改めて思いを致す折もあった。

10年を通じて、放送大学が事務・制作関係のスタッフ諸氏の献身とコンピューターなど新鋭機材の偉力とに支えられている事実を痛感する毎日だったけれども、ついぞカメラに向かうことのなかった私が放送授業の任に当りえたのも、まったくそのお蔭である。関連科目については、それぞれ我国を代表する他大学の諸

先生に主任講師をお願いし、快諾を得ている。この種の御助力にもお礼申し上げたい。放送授業は、各分野の伝統と先端的な研究動向とを二つながら受講者に伝える使命を負っている。専任・客員の同僚諸氏とともにこの仕事に携りうるのは私の誇りであったし、勉学の糧ともなった。

大学院も修士第1回生を出し、情報発信の源と方式の多様化という状況のもと、放送大学の前途は洋々とも、責務ますます重いとも言えよう。かつは大学の将来を担われる方々の御健闘を祈り、かつはこれまでの御交誼を謝しつつ、老兵は学園を去る。

光陰矢の如し。瞬く間の10年であった。放送大学にあって何をなしたか、顧みて忸怩たる思いを禁じえない。しかし、この10年は私にとり、またとない幸せな時ではあった。組織が小さいだけに、文学・哲学から物理学・天文学にいたるまで、他分野の一流の研究者の方々のお話を親しくうかがうことができたし、面接授業や卒業研究・修士論



## バトンタッチ

人間の探究 教授 傳田 章

一句は仲間うちでの流行語になりました。

実は私にとって理想的な語学の授業のイメージはこの『蘭学事始』なのです。4、5人でいいから集まって、みんなまで必死になって考えて議論して、読めなかったものを読み解いて行く、1日3行主義、そんな楽しいことがほかにあるでしょうか。

現在の放送大学にはもちろんまだこんな贅沢な（教員にとっても）授業を開く条件はありません。でも初級でもそれなりに考える授業ができるのではないかと、またそうしなければならぬと心がけてき

ました。語学の学習は、この考えるということとその基本的なところで訓練する場として他の教科の学習とつながっているはずのものです。

私自身は慣れないメディアの扱いにとまどうばかりの10年でした。内容から言ってもどれほど理想に近づくことはできなかったと思います。これからまた50年経てば今の映像もまたセピア色に沈んで見えるようになるのでしょうか、急速な技術の発達に内容が遅れをとらないことを期待して次世代に引き継ぎます。

この正月、機会があって『蘭学事始』を読みました。50年余の間をおいての再読で、「フルヘッドせしものなり」のくだりまで行くと中学生の昔がなつかしく想いだされました。当時私たちは教科書の活字の並びのとおり「フルヘッド」と読んだのですが、奇異な音感に笑いがこみ上げて、数日間この



## 放送授業と面接授業のドッキング

人間の探究 教授 江淵 一公  
(群馬学習センター所長)

業科目で編成されており、そうした授業を広く全国の向学心に燃える人々が自由に受けることのできるシステムは素晴らしいと思います。その一方で私は、放送大学の教育の最前線である学習センターで行われる面接授業では、放送授業の課題を地域の課題に関連づけてフォローしたり、放送授業で提示された理論や方法の有効性を地域レベルで検証するというような授業も大切だと考えてきました。そうした考えから、私は群馬学習センターではここ数年、群馬県の中山間地域の村々が取り組んでいる、過疎化を阻止し地域文化を活性化させるには何をすべきかという実践的課

題を取り上げ、放送授業でも触れた開発人類学・環境人類学・観光人類学の接点領域のテーマとして、「地域おこしの人類学」という面接授業を開講しています。これは合宿とフィールドワークを伴う野外授業なので、お世話くださる職員の方々の献身的な協力があって初めて実現できた授業でした。

放送大学の充実した7年は、こうした沢山の方々のおかげで積み上げることのできた7年だったとつくづく思います。本当にお世話になりました。この場を借りて、心から御礼申し上げます。

放送大学には、九州大学を定年退官した1997年春から7年間お世話になりました。在任中、放送大学の全国化、大学院の創設と院生受入れ、学校法人化というように、矢継ぎ早に組織改革の波が押し寄せたため、超多忙の7年となりましたが、放送大学の歴史的転換点に立ち会うことのできた幸運に感謝しています。

放送大学の放送授業は、各分野の専門家が最新の知識・情報をグローバルな視角から体系化して提供する多様な授



## 短かった? 11年間

自然の理解 教授 濱田 隆士

学校法人」としての私立大学への移行です。

時代はあっという間に流れ、人も組織もシステムもどんどん変わっていくのを実感しました。とりわけ、大学院修士課程については、教養学部という懐かしい名称を受け止めながら、学校組織としては異例の印刷教材とテレビ・ラジオとのタイアップという実践は強烈でした。

これで第1回の修士を平成15年度に輩出することになりますが、今後放送大学としてこの上にどのような課程が立つかは全く闇の中の課題で

す。一般の大学での定年が65歳になれば、放送大学在任期間は最長5年プラス1年間となるでしょうから、修士・博士課程で合計5年間、ということと相容れない事態も発生するでしょう。

先のことは別として、13年間（最初の2年間は東大と兼任）関係する皆様本当に大変お世話になりました。心から御礼申し上げます。今後、皆様におかれましてはさらなるご発展を期待いたしますと存じます。

放送大学が正式に発足して20年以上が経ちました。「だれでも・いつでも・どこでも」という理想を掲げ、かつ全国規模を目指しての旗揚げで、いかにも生涯学習に相応しい出立でした。中でも印象深いのは、大学院修士課程の設置、全国都道府県での学習センター等の開設、そして「特別な

## 全国生涯学習フェスティバルに「放送大学フェア」を出展

放送大学は、より多くの方々に身近に感じてもらうことを目的として、文部科学省等の主催による「全国生涯学習フェスティバル」に今年度も「放送大学フェア」を出展いたしました。平成元年度から開催されているこのフェスティバルも今回で15回を数え、去る11月27日(木)から12月1日(月)までの5日間、沖縄県宜野湾市の沖縄コンベンションセンター及び宜野湾海浜公園を主会場として、「第15回全国生涯学習フェスティバルまなびピア沖縄2003」が開催されました。



このフェスティバルでは、生涯学習に関連する数多くの講演会やイベントなどが企画される中、本学は、沖縄コンベンションセンター会場に、「放送大学フェア」を出展いたしました。この「放送大学フェア」のブースでは、「放送大学紹介コーナー」「学習体験コーナー」「附属図書館所蔵コレクション展」「ミニスタジオ」の4つのコーナーを設け、来場された多くの方々に本学を積極的にPRいたしました。

「放送大学紹介コーナー」で「学習体験コーナー」では、今回初めての試みとして本学在学学生に協力いただくこととし、期間中、沖縄学習センターに在学する学生さんの参加のもと、幅広い分野の授業科目、学習センターを活用した学習方法、衛星放送、CATV、地上放送の仕組み等について、パネルや大学紹介ビデオなどを利用してわかりやすくまた、親身になって説明いたしました。来場された方々からは、授業内容や学習方法などについての質問や相談が多数寄せられ、関心の高さが感じられました。また、特に、在学の方々から、学ぶ楽しさや仲間と支えあう喜びを伝えていただき、より身

近なものとして感じ取っていただくことができました。

「附属図書館所蔵コレクション展」では、『刻む・写す・摺る・刷る - 文字の歴史と印刷文化 -』と題し、紀元前2000年頃の「楔形文字が刻まれた粘土板の行政文書」、羊皮紙に装飾頭文字と端正なゴシック体で書き写された「ラテン語聖書」、日本最古の印刷物と言われる「百万塔陀羅尼(複製)」、16世紀初頭に作られた「時禱書(個人の礼拝用に用いられた書)」など、各時代の代表的な資料を展示するとともに、それらの拡大写真や文字と印刷の歴史を記した年表をパネルにしてご覧いただきました。展示した17点の資料はいずれも稀少なものであり、来場者の興味を引いていました。



また、放送局をもつ本学園の特色をアピールするために、例年人気の「ミニスタジオ」を今回も開設し、授業番組の紹介ビデオの再生や、テレビの合成技術を活用して来訪者に背景画との合成写真を贈呈いたしました。今回は「ふしぎ体験コーナー」として「沖縄の美しい海中の動画」と合成し、あたたか海中にいるかのような体験を味わってもらった上での写真撮影とあって連日大好評でした。写真が仕上がる間には、アンケートの協力をお願いし、本学をさらに広く知ってもらうことができました。

さらに本フェアにあわせ、12月3日(水)には、沖縄学習センターにおいて、「高等教育と人材育成 日仏の教育の違いを中心に」と題して柏倉康夫教授(専攻:産業と技術)による公開講演会を開催いたしました。

講演は、日本の大学のあり方が問われている昨今、日本の大学教育とフランスの教育制度を比較しつつ、



人材育成のあり方を考えるという内容で、当日多数ご参加いただいた本学の学生さん、教育関係者や一般の方に、大変有意義な講演会となりました。

今回のフェスティバルは、5日間の会期中、本学のブースには、5千人を超える多くの方々の来場があり、大盛況のうちに幕を閉じました。

なお、フェスティバルへの参加にあたっては、多くの方々からの協力のもと、無事終えることができましたが、特に沖縄学習センターの多くの学生さんには、熱意あふれる説明をしていただき、この場をお借りして感謝を申し上げます。

次回の第16回全国生涯学習フェスティバルは、愛媛県において、平成16年10月9日(土)~13日(水)まで開催される予定です。



左:「ラテン語聖書」1350~65年頃  
イギリス制作 羊皮紙零葉一枚  
右:ケルヴェール印行「時禱書(じとうしょ)」  
1508年 パリ刊



「百万塔陀羅尼(ひゃくまんとうだらに)」天平宝字8(764)年~神護景雲4(770)年制作(複製)

## 動き出したアジアの公開・遠隔教育(ODE)ネットワーク

人間の探究 助教授 大石 和欣



中島東京多摩学習センター所長「大学の窓」取材風景(撮影:国井豊)

例年行われているアジア公開大学連合(AAOU)の年次会議が平成15年11月11日から14日の間バンコクにおいてスコタイ・タマチラート公開大学(STOU)の主催により開催された。本年度は本学より学長代理として中島尚正教授(東京多摩学習センター所長)を団長とし、岩永雅也教授、筆者の教員3名に国井豊制作部次長、関瑞穂教務課教務第二係長を加えた計5人が参加した。

### 二つの異空間

バンコクは11月でも摂氏30度を超える。車が渋滞する通りに立つと排気ガスのせいもありムツとしている。といっても既に乾期に入っており湿度はそれほどでもないのだろう。歩いているとやや汗ばむ程度である。と、いきなり後ろから客席シート付きのバイクが脇を掠めて通っていく。バンコク名物のバイクタクシー、いわゆるトゥクトゥクである。かろうじてよけるが、バイクは歩行者の危険など気にすることもなく歩道ぎりぎりのところを2台、3台と次々に通っていく。「マイペンライ(まあ大丈夫さ)」といったところか。タイ人の口癖である。確かに街全体が賑やかながらもどこか大らかでのんびりしている。歩道の

あっちこっちに寝そべる犬たちまでも欠伸しながら「マイペンライ」と言っているようだ。

しかし、AAOU会議の会場であるサイアムシティホテルに一歩足を踏み入ると空気が変わる。よくきいた冷房のせいだけではない。のんびりとした外の様子とは異なり活気と緊張感が適度に混ざり合った国際会議の雰囲気漂っている。言葉も肌色も様々に異なるアジアの公開・遠隔教育関係者が一堂に集うAAOU会議は特殊な空間である。今回の会議は通算で17回目となる。わが放送大学は第1回目の役員会議をホストして以来一貫して役員校の一つとしてAAOUの運営に貢献してきた。現在ではアジアの37の公開大学が正会員、英国のオープン・ユニバーシティを含む世界の30大

学が準会員である。今年も会員校から参加者が集まり研究発表や交流を通して情報や意見を交換した。本学からの派遣団は上記の5人だが、それに加えて画期的なことに本学「大学の窓」ロケ班が初の海外取材のため同行した。

### スコタイ・タマチラート公開大学(STOU)

会議自体について述べる前に本学とも交流があり会議を主催したスコタイ・タマチラート公開大学(STOU)について少し述べておこう。国民の教育に熱心だった先々代の国王ラーマ7世の名前を冠したSTOUは今年度で25周年を迎えた。ラーマ7世の白い廟を囲むように広々とした緑が広が

りいくつかの建物がのんびりかつ優雅に点在している。せせこましさは微塵もない。教育までも「マイペナライ」なのだろうか、という疑問を抱くが、「大学の窓」の取材のためトン・イン学長にインタビューするとそれは間違いであることがわかった。現在学生数は20万人を誇り、自前のテレビ・ラジオチャンネルこそはないがテープ・ビデオ等を含む質の高い自習教材を制作し、学位取得や転職を目指す10代後半から40代までを中心に幅広い層の学生をとりこんでいる。修行期間中の僧侶や刑務所に服役する人々にまで大学教育を提供しているその教育理念には感心せざるをえない。なかなかの経営上手で歳入の80%は自助努力で稼いでいるという。現在はeラーニングを含んだ新しいメディアによる公開・遠隔教育(ODE)を主軸の一つに据えて大学経営を進めるべく戦略を練っている。今回のAAOU会議はそうした新しいスタイルのODE構築のための宣伝と情報収集を目的として主催したのである。その入念な準備と熱意は並々ならぬものであったといつてよい。

## 錯綜する視座

さて今回の会議であるが「公開・遠隔教育間における協調関係強化のためのネットワーク及びパートナーシップ」というテーマを中心に研究発表と意見交換がおこ

なわれた。それに絡める形で「デジタル」という言葉が頻りに発表で用いられていたのは時代の趨勢であろう。といつても実際のところ各国のインフラ整備は未熟であり、顕著なデジタル化が行われているわけでも、注目に値するデジタル教材開発が行われているわけでもない。しかしながらSTOUを含むアジアの公開大学のいくつかは、AAOUという大きな集団の中でのネットワークづくり、教職員の派遣交換、あるいは共同研究などにより、虎視眈々とデジタル時代への移行準備やその他さまざまな教育的利益の追究を戦略的に行っている。特に香港公開大学のAAOUにおける存在は際立っており、理事会、ネットワークづくり、研究発表それぞれにおいて中心的役割を担い、2月の国際遠隔教育評議会(ICDE)の開催によって世界の公開大学連合の中でもその認知度を高めようとしている。

基調講演は5本あり、それぞれ異なる視点から本会議のテーマに関するものであった。ウィット・スリサ アン博士(タイ)はタイにおけるODEが地域コミュニティに根ざしたものと産業に根ざしたものを両軸として発展している事実を国家政策や国内情勢と絡めながら紹介した。ガジャラジ・ダナラジャン卿博士(The Commonwealth of Learning)は視点をアジア全体に移し、貧困・女性の社会的立場の向上・エイズ問題などの解決手段として今後



渋滞するバンコク市街(撮影:国井豊)

ODEが果たすべき役割についての方針・戦略を概観した。他3本はeラーニングに関わるものであった。マイケル・チャートン博士(アメリカ)はeラーニングに今後遠隔教育が移行していく際の技術的・政策的な枠組みの変化や支援の問題を論じ、またタイウィーサーク・コアンナンタクル博士(タイ)はタイにおけるODEのデジタル化の可能性とそのため教育・研究機関同士の関係強化の必要性を国家経済的な視点から論じた。ポール・バシッチ教授(英国e大学特別企画責任者)はeラーニングの大学教育における重要な役割とその世界的レベルでの連携強化の実情を紹介したが、結局のところ英国e大学の宣伝である。おなじeラーニングに関しても国レベル、機関レベルで全く捉え方が異なっていて共通点を見出しにくい、そのことが逆に公開・遠隔教育の質および社会的意義の地域的なパラつきを示唆し、それがゆえにこそ公開教育機関同士の国際的協調関係強化の必要性を裏付けているといえよう。

## 研究発表

放送大学からは岩永教授と筆者が研究発表を行った。まず第一目に大石が「e-Japanにおける教育改革」と題した発表で、現在進行中のe-Japan計画のなかにみられる様々な次元での連携協力が放送大学を含む生涯教育の領域でいかなる影響を及ぼしているか実例をとりあげながら紹介・分析した。セッションは非常に盛況だったが、それは日本の急速な通信情



AAOU本会議(撮影:国井豊)

報網の整備とその教育への影響についてアジアの遠隔教育関係者が相当な興味と関心をいただいていることを示すと思われる。休憩時間にもいろいろな質問を受けた。ただパワーポイントというデジタルメディアを一切用いずひたすら言葉のみのアナログ発表を行ったのは今回私一人であったようだ。発表で教育のデジタル化について論じただけに、内容と手段の矛盾という批判は免れない。

この失態を補っても余りあったのが岩永教授の「放送大学におけるマルチメディア科目の連携協力開発～遠隔学習からヴァーチャル学習へ」と題した2日目の発表である。法人化した放送大学の現状を踏まえた上で、これまで行ってきた他機関との連携関係、そして教授自らが制作したCD-ROM教材の教育的意義を確認し、今後の遠隔学習が新しい教育メディアの開発およびヴァーチャル学習を通じた他機関との連携協力へと進んでいく可能性と必要性を説いた。発表はパワーポイントを用いて明快かつ円滑に行われ、熱心な聴衆

に対してCD-ROM教材の開発の可能性を含む本学の今後の動向への関心を大いに喚起した。

「デジタル」や「eラーニング」を話題とした発表は他にも多かったが、技術的にも内容的にも話題先行という感が強い。そういうなかでICT(情報通信技術)の教育的効果を研究するだけでなく、その問題点を指摘する研究もみられたのは重要な点であろう。最優秀論文賞をとった香港公開大学のウェイ・ユアン・ザンと香港教育大学のリュクサン・ウォンの共同研究をはじめとして、オンラインでの学習や議論への参加に学生および教員が必ずしも積極的ではなく、ICTの発展にともなうコンピューター利用者と非利用者の不平等の深刻化を指摘する発表も幾つか見られた。研究発表全体で「効能(efficacy)」、「効率(efficiency)」、「品質(quality)」といった言葉が頻りに使われていたのは、ICTの遠隔教育への応用に対して興味を持ちながらもその有効性についての不安を拭ききれない一種の強迫観念(オブセッション)のあらわれなのかもしれない。

## アジアにおける放送大学の位置づけ

今回の会議での交流や研究発表を通して感じたのはアジアの公開大学が日本の放送大学に大きな期待を寄せていることである。デジタル化の波が世界の公開・遠隔教育を覆い、教育メディアの見直しを各機関が迫られている現在、技

術的にもソフトの面でも高質かつ大規模な資産をもつ本学がどう今後動いていくのか彼らは強い関心を持って注視しているのである。しかし、その一方でタイ、香港や韓国などの公開大学は教材開発や人材交流を通してすでにデジタル時代のネットワークづくりに動き出していることも忘れてはならない。世界の遠隔教育における潮流が変化しつつある現在、本学がどこにどう船をこぎ出していくべきかよく考えなくてはならないであろう。

AAOUおよびSTOUについては「大学の窓」で既にそれぞれ昨年12月3日～9日、12月24日～28日に放送済みであるが、自前のロケ隊をAAOUに持ち込んできたのは本学だけであり議場で注視と羨望の的となったのはいうまでもない。発表の最中カメラが回っているのは発表者にとっては極度の緊張を強いるものであったが、本学の広報にとっての意義は非常に大きいものであったと思う。放送大学生がアジアのほかの国々で同様の教育環境で学習を続ける学生の存在に気づき自らの学習の励みとするだけでなく、今後彼らとの直接的な交流を求め公開・遠隔教育のさらなる発展につなげていく契機としてもらえればと願っている。日本国外の公開・遠隔教育の状況に目を向ける機会が今後放送大学生にも与えられることで、世界的視野から生涯教育、遠隔教育を見直し放送大学のさらなる発展につながっていくはずである。



中島東京多摩学習センター所長を中心とする放送大学派遣団と「大学の窓」取材班



STOU(ラーマ7世廟)



## 社会保険と市民生活(04)

今日の日本社会においては、ほとんどすべての市民が社会保険と何らかのかかわりを持ちながら生活を送るようになってきている。「社会保険と市民生活」というタイトルのこの講義は、私たちにとって切り離すことができなくなっている社会保険の成立の背景、その仕組み、活用方法と課題について考察し、理解することを目的としている。

とりわけ、近年顕著になっているライフスタイルの変化や職業生活の変化とともに、社会保険はどのような問題点と課題をもつこととなっているのかについても考えてみたい。

たとえば、職業の世界が、終身雇用、年功賃金体系のもとで正規

従業員として働くという就業形態よりも、パートやアルバイト、派遣労働などの立場で就業する形態へとシフトしている現状を踏まえ、年金保険や医療保険はどのような問題点をかかえることになるのか、雇用保険や労働者災害補償保険はどのような論点を含むこととなるのか、など多くの新たな課題がありそうである。

また、人口の少子化・高齢化と年金財政の関係、医療保険と高齢者医療、介護サービスと介護保険の関係などよく取り上げ

早稲田大学 教授 久塚 純一  
生活と福祉 教授 大曾根 寛

られる話題もつつみこみながら、この講義が作り上げられている。

本講義は、このような問題意識を背景にもっているもので、若い方から中高年齢層まですべての世代に関心をもっていただけるものと思う。



久塚教授



大曾根教授

## 中世日本の物語と絵画(04)

学習院大学 教授 佐野 みどり  
京都工芸繊維大学 教授 並木 誠士

美術の歴史を考える場合、大別して二つの方向があります。ひとつは、作品の芸術的達成の様相やその過程、あるいは、地域や時代によって、どのようなスタイルの差があり、またそれらはどのように伝播、継承されるのかといった、いわゆる様式史の立場からの考察です。そしてもうひとつは、作品がいかなる社会的要請のもとに制作され、そして誰がどのようにそれらの作品を受容したのか、あるいは作品はイメージをどのように流通させていくのかといった、美術の生産と消費を社会的視野のもとで考える美術社会史の立場です。このふたつの方向は、作品の分析に対してまったく異なるアプローチを要求しているように見えますが、後者の立場に立つからと

いて、個々の作品の作家や制作年代の判定が不要なわけではなく、また前者の立場からの解析にあっても、制作背景の解明は作品理解におおいに益するものです。つまりふたつの研究アプローチを交差させることによって、美術の歴史はよりいきいきと立体的に捉えることができるのです。ところで中世の絵画には、物語を題材とする作品が多数伝来しています。これらの作品は、注文主の政治的立場の表明や地位の保証となったり、持ち主の権威付けとなったりもしますが、今回の講義で

は、2人の主任講師と<中世の信仰と絵画>の担当講師の計三名で、そのような中世日本の物語絵画を中心に、主題の選択や物語る仕組み、そして制作背景や享受の実際などを具体的に考察し、中世のメンタリティに迫ってみたいと思います。



佐野教授



並木教授

## いくつもある「研究室」

産業と技術 教授 佐々木 弘



私には、今たくさんの「研究室」というべきものがある。

第1の「研究室」は、いうまでもなくわが家の書斎である。ここには、公営企業や公益企業をはじめ、規制関連の相当量の文献や資料があり、じっくり腰を据えて仕事をするときはここに籠もることになる。書斎では、「公益企業規制の生成と発展」に関する史的研究、「公共料金関連事業分野の規制改革」のグローバルな比較研究、

公営企業の経営問題の実証分析等々、いくつかのテーマを常にもちながら資料を読み、考え、書いたりする。長い時間をかけて仕事をするのに適する一番快適な仕事場である。

第2は、国をはじめ各種の審議会や委員会の席である。これは、今後の政策にかかわる重要かつホットな課題が通常議論の対象となるが、それに関連してよく準備された資料、出席される様々な経歴や経験をもつ人達の意見と彼等との討論のやりとり、官僚の考え方等、勉強になるところがきわめて多い。これもここ20数年来の私の貴重な「研究室」だ。

第3の「研究室」は新幹線の中である。今ほとんど毎週のように新幹線を利用する生活をしている。私の乗る座席もほぼ決まって

いるので、乗った瞬間から落ち着く。ここでの2~3時間は電話もFAXもなし、車窓からみる景色は毎週みても少しずつ変化しているし、楽しい「研究室」である。ここでも資料を読み、講演の荒筋を考える。冬になり富士山もよくみえるようになると、コーヒ一片手に至福の「研究室」となる。

第4は、放送大学の院生達と2~3ヶ月に一度関東と関西で開く「オフィス・アワー」である。東京では、私の常宿のホテルのレストランでいつも院生と会うことにしている。ここで10人程の院生と議論したり、彼等の相談に応じたりしていると、つい時間を忘れる。私にとっては、これもまた有益な「研究室」である。

## 心理臨床の更なる発展を目差して

発達と教育 教授 滝口 俊子



臨床心理士の仕事は、次のように分けることができます。相談にこられた方々の適確な理解(アセスメント)、心理療法・遊戯療法などによるクライアントへの関わり、コミュニティへのアプローチ。これらの臨床実践に密接に結びついて、臨床心理学の研究が行われています。

フロイトの精神分析学を基盤とする慶応グループにおいて心理臨床と研究をスタートした私は、や

がて結婚し子育てに携わりながら臨床を続けるうちに、精神分析学とは同じ深層心理学に属するユングの分析心理学へと、関心が移ってゆきました。ユング心理学は、人生の後半への関心と女性性の理解が深いという特徴が、その理由でした。ユング心理学によって普遍的な無意識界への関心が広がるにつれて、箱庭療法や風景構成法など非言語的な心理療法にも携わるようになりました。

今も、さまざまな世代の方々と、遊びを中心とする遊戯療法、対話を主とする心理療法、非言語の箱庭療法・表現療法など、個々のクライアントに合った形でお会いしています。また、臨床心理士の訓練に不可欠なスーパーヴィジョンや、全公立中学校に配置されたスクールカウンセラー、現代的な課

題である子育て支援などの、心理臨床の専門性の確立にも取り組んでいます。

これまでの臨床では、子どもの成長・発達の援助、学生相談など、人生前半の課題に携わることが多かった私ですが、昨今では、この世から死にゆく準備としての心理学的な課題にも関わり始めています。女性自身の目で女性の人生を見つめ、「女性の個性化」に関する研究も早くまとめたいと思いつつ、日々の任務に追われている現状です。

この小さな文に目を止めてくださった方が、臨床心理学の研究は研究室の外の「心理臨床実践」と不可分であることを、ご理解いただけたなら、嬉しく存じます。

# 平成16年度第1学期教務スケジュール

# 教務のお知らせ

学部 (教養学部)						
月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
第1学期の学習	17(土)	28(水)	6(木)	21(水) 22(木)	5(木) 22(日)	30(木)
	放送授業期間		放送授業期間		集中放送授業期間	
第2学期の準備	面接授業(毎週型・土日型)		面接授業(集中型)		面接授業(集中型)	
	下旬~月上旬 通信指導の送付	通信指導提出	9(水) 必着	中旬 単位認定試験通知(受験票)の送付	中旬 成績通知の送付	
第2学期の準備	28(金) 消印	3(木) 必着	中旬 面接授業(集中型)の授業料納入	25(日) 31(土)	27(火) 消印	10(火) 必着
	面接授業(集中型)の科目登録申請	面接授業(集中型)の授業料納入	単位認定試験	科目登録申請要項の送付	第2学期科目登録申請	科目登録決定通知の送付
第2学期の準備	平成16年度第2学期出願(平成16年度第1学期末で学籍切れの学生)		15(火) 消印	3(火) 必着	14(火)	印刷教材の送付
	合格通知書の送付		授業料納入		印刷教材の送付	

## 平成16年度放送大学大学院 文化科学研究科(修士全科生)入学者選考結果

高度専門職業人の養成を目的とする放送大学大学院(第三期生)に、557人が合格しました。

### (1) 合格者の概要

年齢層は、30~40歳代が約6割を占め、職種では、会社員・銀行員等が約3割、教員及び公務員がそれぞれ約2割でした。他大学卒業者が約7割を占め、放送大学卒業者は約3割でした。なお、本学の実施する出願資格事前審査(4年制大学卒業等の資格を持たない方の出願資格の審査)を経て合格した方は13名です。

### (2) 入学者選考状況

平成14年度から学生受け入れを行っている放送大学大学院では、修士の学位の取得を目指す修士全科生(募集人員:500人)について、第1次選考(書類審査)、第2次選考(小論文試験、口頭試問)を実施し、合格者を決定。12月12日(金)に本人宛通知しました。

プログラム等	総合文化		政策経営	教育開発	臨床心理	計
	文化情報科学群	環境システム科学群				
募集人員	140人程度	130人程度	130人程度	60人程度	40人程度	500人
出願者数 (倍率)	211人 (1.4)	162人 (1.2)	262人 (1.7)	205人 (2.9)	1,151人 (25.6)	1,991人 (3.6)
合格者数	151人	140人	150人	71人	45人	557人

## 大学院(文化科学研究科)

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
第1学期の学習	17(土)	28(水)	6(木)	21(水) 22(木)	5(木) 22(日)	30(木)
	放送授業期間		放送授業期間		集中放送授業期間	
第2学期の準備	面接授業(毎週型・土日型)		面接授業(集中型)		面接授業(集中型)	
	下旬~月上旬 通信指導の送付	通信指導提出	9(水) 必着	中旬 単位認定試験通知(受験票)の送付	中旬 成績通知の送付	
第2学期の準備	10(土) 11(日) 17(土) 18(日)	10(月)	15(火) 消印	27(火) 消印	10(火) 必着	14(火)
	研究指導オリエンテーション(臨床以外)	研究指導オリエンテーション(臨床)	科目登録申請要項の送付	第2学期科目登録申請	科目登録決定通知の送付	印刷教材の送付
第2学期の準備	平成16年度第2学期出願		15(火) 消印	3(火) 必着	14(火)	印刷教材の送付
	合格通知書の送付		授業料納入		印刷教材の送付	

## 兵庫学習センター 「第18回神戸景観・ポイント賞」を受賞

「神戸景観・ポイント賞」は、神戸市が神戸らしい優れた都市景観の形成に寄与した行為を表彰することにより、市民および事業者の景観に対する理解と意識の向上を図ることを目的として、昭和61年から表彰が行われており、今年で18回目を迎える賞であります。

この賞は、市民からの推薦を公募により行い、選考委員会での審査を経て選定されるものであります。

この賞に平成15年度「神戸大学アカデミア館・放送大学兵庫学習センター」が選定され、平成15年12月11日(木)、こうべまちづくりセンターにおいて授賞式が行われました。

本建物の受賞理由は、地域特性を活かした眺望点の形成ということでありました。

今回本学の建物以外には、「神戸ウイングスタジアム」が神戸の新たなランドマークの創出ということで受賞されております。



平成17年度修士全科生学生募集要項は6月15日(火)から配布を予定しています。  
修士全科生入学者選考についての日程等詳細は平成17年度修士全科生学生募集要項を入手し確認してください。

## 学生用番組表と授業科目一覧について

本学に学籍を有する学生さんに、各学期毎に、本学が提供する放送授業科目の各放送時間帯を一覧でお知らせするため、学期開始時期（印刷教材送付時期）に合わせて、学生用番組表をお送りしておりますが、授業料等ご入金時期の関係等で、各学期の放送授業開始日後にお手元に届く場合がございます。

その場合は、学生募集要項に同封されております、授業科目案内の冊子中にあります放送授業番組時間割を参照いただければ、各放送授業の番組放送時間を知ることができますので、授業科目案内は、出願や科目登録申請後も大切に保管していただきますようお願いいたします。

また、この授業科目案内は、各年度第1学期と第2学期に継続して学籍を有する学生さんについては、第1学期のみ送付いたしますが、第2学期の科目登録の際にも必要となりますので、併せて大切に保存いただきますようお願いいたします。

## 単位認定試験における印刷教材等の持込み許可物品について

印刷教材等の持込み許可物品一覧については、受験票と併せて送付しておりますが、さらに平成16年度第1学期からは、試験の約1カ月前に各学習センターにて掲示し、またホームページにも掲載する予定です。

教務課教務第三係

## 夏季集中科目の学生募集が始まります

夏季集中放送授業期間に「司書教諭資格取得に資する科目」、「准看護師の看護師資格取得に資する科目」を開設します。

学生募集等の日程は下記のとおりです。

	司書教諭資格取得に資する科目	准看護師の看護師資格取得に資する科目
学生募集要項配布	平成16年 4月 1日（木）～	平成16年 4月 1日（木）～
出願受付期間	平成16年 5月 1日（土）～ 5月31日（月）〔必着〕	平成16年 5月 1日（土）～ 5月31日（月）〔必着〕
放送期間	平成16年 7月22日（木）～ 8月 7日（土）	平成16年 7月22日（木）～ 8月16日（月）
通信指導提出期限	平成16年 8月13日（金）	平成16年 8月13日（金）
単位認定試験	平成16年 10月22日（金） （単位認定試験レポート提出期限）	平成16年 9月24日（金） 平成16年 9月25日（土） （いずれか1日を選択）

## 事務組織の再編成について

平成16年4月1日付けで本部事務局の事務組織の再編成が行われます。

詳細は、次号でお知らせします。

## 長崎学習センターの移転について

長崎学習センターが平成16年4月1日（木）に現在の多良見町から長崎大学文教地区キャンパス（長崎市）へ移転いたします。

〔移 転 先〕

長崎大学文教地区キャンパス内  
総合教育研究棟3階

〒852 8521 長崎市文教町1番14号 095 813 1317

3月末までのお問合せ先

長崎学習センター

〒859 0414 長崎県西彼杵郡多良見町元釜名5 15  
（エコソールビル2号館2階） 0957 44 1313（代）

## 編集後記

リスクの時代である。地震、交通事故、テロ、犯罪、病気、失業、食品衛生問題など、生活者にとっても、生活の安全と安心を脅かすリスクが多様化・増大化している。

保険はリスク移転に有効な手段であるが、生命保険には加入したくない、という友人がいる。「僕が亡くなるのを家族が待っているみたいでいや」なのだという。そして家族は彼の意思を尊重しているとのこと。生活リスクの管理には一定の原則があるものの、実際の具体的なリスク管理のなされ方は実に多様である。リスク認知および対応についての価値基準が、家族によって多様だからだ。この家族の場合、死亡リスクの経済的保障よりも、家族関係のトラブルを回避することを選択している。しかしリスクはいつ具現化するかわからない。友人には、リスクコントロールとしての健康管理や交通安全等と、リスクファイナンスとしての貯蓄とを行うよう強く勧めたのは言うまでもない。（奈良由美子）

## 大学通信編集委員会

（平成15年度）

委員長 教授 阿部 齊  
副委員長 同 徳丸吉彦  
委員 同 香山壽夫  
〃 助教授 奈良由美子  
〃 同 山岡龍一  
〃 同 坂井素思  
〃 同 大橋理枝

（編集事務担当

教務部修学指導課）



放送大学学園

http://www.u-air.ac.jp/hp  
ISSN 1343-3369

R100